

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月18日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20401015

研究課題名（和文） レンブラントおよびレンブラント派における
和紙による版画素描作品の研究研究課題名（英文） Study on Prints and Drawings on Japanese Paper
by Rembrandt and his Circle

研究代表者

幸福 輝 (KOFUKU AKIRA)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・上席主任研究員

研究者番号：00150045

研究成果の概要（和文）：

欧米の版画室での実地調査に基づき、レンブラントがどのような作品において、どのような目的で和紙を使用したのかを明らかにした。また、17世紀から20世紀までのレンブラント版画関連文献で、レンブラントの和紙作品がどのような評価を受けてきたのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Based on a firsthand study in prints rooms in Europe and the States we shed new light on which impression and with which purpose Rembrandt used Japanese paper. And we made a data on Rembrandt use of Japanese paper in the literature on the print by Rembrandt from the 17th to the 20th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
総計	8,500,000	2,550,000	11,050,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：レンブラント、版画、和紙

1. 研究開始当初の背景

レンブラントが和紙を使ってその版画を刷ったことは広く知られていた。しかし、どの作品に使われたのか、どのような目的で使われたのか、何時頃使い出したのか、といった細目についての具体的な議論はなされていない状況であった。

この主題についての唯一の文献はホワイトとボーンによるものである。(Christopher White & Karel G.Boon, Rembrandt van Rijn: Hollstein's Dutch and Flemish Etchings, Engravings and Woodcuts, vols XVIII & XIX, 1969) また、現在、このホルシュタイン版画体系シリーズの新版レンブラントの巻を準備しているオランダのレン

ブランド版画研究者エリック・ヒンテルディングが、半世紀前のホワイトボーンの研究に基づきながらも、版画に使われた紙にも注目しながら世界各地に所蔵されるレンブラントの版画の調査を開始していた。従って、ヒンテルディングと連携しながらこの調査を進めることは、とても重要なことであった。

また、かなり限定的なものではあるのだが、レンブラントはその素描にも和紙を使っている。従って、このオランダの画家における和紙の使用を問題とするならば、素描を全く無視することはできない。また、さらに広げるなら、レンブラントの周辺で活動した作家たちの版画や素描にも、断片的にはあるが、和紙を使った作品が存在する。これらについて、具体的な調査はおこなわれておらず、本研究においては、一方で、レンブラントの版画については、資料も多いので、より集中的な調査をおこない、他方、それ以外の和紙の使用については、できるだけ基礎資料的調査をおこなうのが妥当ではないかと考えた。

素描を中心とした和紙の問題については、レンブラント素描の権威であるロイヤルトン＝キッシュが広い知見を有しており、彼が勤務していた大英博物館版画素描室で、彼から直接にさまざまな作品を見せていただきながら、なるだけ多くの和紙の作例を確認するようにつとめるようにしたいと考えた。

2. 研究の目的

上記したようなこと、すなわち、レンブラントがいつ頃から和紙を使い出したのかを具体的な作品をもって明らかにすること、また、和紙の使用が単なる異国趣味でないとするれば、和紙を使うようになった動機はレンブラントという画家全体の中でどのように説明することが可能なのかを明らかにすることを大きな目的とした。

後者の議論が説得性をもつためには、どの版画に和紙が使われたかを明らかにするだけでは足りない。レンブラントの場合、ひとつの版画には複数のステートがあり、事態を錯綜させている。手短かに説明しよう。レンブラントの場合、1枚の版画が完成されると、その段階で紙に刷られる。こうしてできたのが第1ステートの版画である。しかし、レンブラントはさまざまな理由から、第1ステートが刷られた後に、銅板原版に手を加え、部分的に、あるいは、全面的に版に修正を施した。こうして刷られたのが、第2ステートである。レンブラントの版画の場合、第4、第5ステートというのはごく普通のことで、多

いものになると第10ステートまで数えることのできるものさえ珍しくない。

紙の使用という観点からは、このステートの複数性が非常に厄介な問題となる。というのは、たとえ、レンブラントの版画の制作年代がわかっているとしても、それは原版につけられた年代であり、はたして、第3ステートが第1ステートに続いてすぐに刷られたのか、数年の時間差を置いて刷られたのか、容易にわからないことが多いからである。

上記した、ヒンテルディングの研究により、現在のところ、レンブラントは基本的にはひとつの紙を集中的に使用しては、次の紙を使ったという説が広く認められており、さまざまな西洋紙の透かしの研究から、個々の紙に版画が刷られた年代が判定可能となっている。和紙についても、例えば、例外的に早い年代の版画に使われた和紙刷り版画や、遅いステートに使われた和紙刷り版画はレンブラント歿後に、レンブラントの原版を入手した出版者（版元）が刷った可能性が指摘されている。

従って、レンブラントの和紙刷り版画といっても、レンブラント自身による和紙刷り版画とレンブラント以外の者による和紙刷り版画があることになり、この区別も本研究の重要な目的のひとつとなった。

以上のような研究から、レンブラントは1647年頃から和紙を使い出したこと、そして、1650年前後は、レンブラントがより瞑想的雰囲気のある作風に移行する時期にあたっており、和紙の使用がまさにこのようなレンブラントの画家としての発展に合致するものであることを明らかにした。

また、ほぼ同時期に、レンブラントはその風景素描のほとんどを白い紙ではなく、着色を施した上で使っている。これは、より明示的な空間表象ではなく、空気感に満ちた微妙な表現を狙ったことだったと思われるのだが、これも版画における和紙の使用に通じるレンブラントの芸術上の要請だったことも明らかにした（ただし、どうしてこうした風景素描に和紙を使わなかったのかについては、後述するリーフェンスによる和紙素描があるだけに、やや不可思議な気はする）。

また、17世紀から20世紀までのレンブラント版画研究史において、和紙刷り版画の問題がどのように議論されてきたかを明らかにすることは、レンブラントの和紙刷り版画の受容という観点からきわめて興味深い問題であり、また、特に、18世紀には、一

方で、前述したレンブラント歿後の和紙刷り版画が制作された時期にも重なっており、18世紀に和紙を含む東洋紙がヨーロッパでどのように理解されていたかを文献的に明らかにしようとした。

素描に関しては、個々の作品の制作年代も不明なものが多く、また、史料があまりにも断片的なため、和紙の素描作品の見聞を増やすということ以上のことをおこなうことは困難なように思われたが、他方、レンブラントとリーフェンスに関しては、作品数も多く、ある程度の調査をおこなうことができた。

リーフェンスの和紙刷り素描として知られているものは、風景素描である。一般に想定されているこれらの素描の制作年代は1660年代半ばで、それは、レンブラントの和紙刷り版画が一定の好事家たちに浸透した時期にあたる。これらの素描は仕上げの精度が高く、いわゆるマーケットを意識した商品としての素描である。可能性としては、レンブラントの和紙刷り版画を購入した収集家を購入者に想定して制作されたとも考えられるが、専門家の間では、この制作年代にも疑問をもつ者をいるし、また、ロイヤルトン=キッシュなどはこれらの素描の作者として同名の息子を想定しており、現時点でこれ以上の推測は控えるべきだろう。

レンブラントの和紙として知られているものは、いわゆるムガール（インド）絵画の模写として知られる作品群である。これについては、多くの研究者が1650年代後半という制作年代を提案しており、また、東洋絵画の模写という特殊な性格により、これまでさまざまな議論を引き起こしてきたものである。けれども、レンブラントの他の作品との関連を具体的に示すことができず、また、他の画家の作品にも関連作品はほとんど見られないため、それ以上の議論にはひろがらないまま、今日に至っている。

レンブラントの和紙素描について現時点で新たな解釈を提示することはできないが、25点以上にもものぼる模写素描が和紙に描かれたことには必ず理由があったはずであり、今後ともレンブラントと和紙という大きな視点からこの問題の研究を続けていきたいと考えている。

3. 研究の方法

第一に、欧米の多くの版画室で、できるだけ多くの和紙刷り版画について、実地に調査をすること、また、多くの史料にあたり、和

紙および和紙以外の東洋紙に関する史料を拾い上げることを心掛けた。上記したホワイト/ボーンに記載されている和紙の記述に基づいて、さらには、ヒンテルディングの最近の調査結果（現時点ではまだ公刊されていないが、著者本人から部分的にその調査報告書を手した）をも参考にしながら、欧米各地の版画室で、レンブラントの和紙刷り版画について、調査をおこなった。

また、主として、ハーグの国立オランダ美術史研究所でおこなったが、18世紀から20世紀初頭までのレンブラント版画カタログの調査をおこない、このような文献で、どのように和紙（東洋紙）刷り版画が言及されているのかについて、詳細な調査をおこなった。また、同研究所では、主として18世紀の版画および素描の売り立て記録の調査をもおこない、そこでどのように和紙（東洋紙）が言及されているのかについての調査をもおこなった。

4. 研究成果

結果として、本研究とリンクすることになったのだが、2011年春に国立西洋美術館でレンブラントを主題とする展覧会を開催することが決まった。そのため、同展覧会を本研究の成果を公開するひとつの機会ととらえ、展覧会の一部に「レンブラントと和紙」を主題とするセクションを設定して、展覧会の準備を進めた。当初は、展覧会のひとつのセクションに過ぎなかった和紙のテーマは、諸般の事情から予定より膨らむことになり、ある意味では、展覧会それ自身が「レンブラントと和紙」をテーマとするものになったことは、本研究にとってはかえって好都合であった。また、東日本大震災のため、実際には中止されたのだが、展覧会を記念する国際シンポジウムの記録を『論文集』として刊行した。

版画は同じものが複数存在するため、時に、印刷物のような扱いを受けてしまうが、専門家を除けば、実際にはそれを目指す機会は以外に少ない。紙という脆弱な素材であるため、絵画とは異なり、欧米の美術館でも常設展示されているわけではない。まして、レンブラントの和紙刷り版画を目にする機会など、ほとんどの日本人にはなかったものと思われる。展覧会でレンブラントの多くの和紙刷り版画が展示されたこと、また、それを丁寧に再現した図録が出版されたことの意義は決して小さなものではなかったと自負するものである。

展覧会（および同展図録）とは別に、以下

の研究報告遺書を刊行した。

『レンブラントおよびレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究』（2012年）（本科研報告書）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①幸福 輝 「淡い色の紙—レンブラントの和紙刷り版画」、『レンブラント 光の探求/闇の誘惑』（展覧会図録）、国立西洋美術館、査読無、2011年、61—77頁（English: pp.329-343）

②幸福 輝 「レンブラントの東洋紙刷り版画とその受容」、『レンブラント光の探求/闇の誘惑』（論文集）、国立西洋美術館、査読無、2012年、53—63頁（English: pp.129-138）

〔学会発表〕（計1件）

幸福 輝 「レンブラント：和紙刷り版画の周辺」、国立西洋美術館展覧会記念講演会、2011年5月21日、国立西洋美術館講堂

〔図書〕（計3件）

①『レンブラント 光の探求/闇の誘惑』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2011年

著者・監修者：幸福輝

共著（総ページ：358）

②『レンブラント光の探求/闇の誘惑』（論文集）、国立西洋美術館、2012年

著者・監修者：幸福輝

共著（総ページ数：156）

③『レンブラントおよびレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究』（本科研報告書）、国立西洋美術館、2012年

著者・監修者：幸福輝

共著（総ページ数：534）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

幸福 輝 (KOFUKU AKIRA)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館

学芸課・上席主任研究員

研究者番号：00150045

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：